ユダヤ大悪列伝

だいわるれつでん

烏賀陽正弘

論創社

はじめに

ユダヤ人が、いろんな面で他人種と違うと気づいたのは、私がニューヨークに初めて赴任した時のことである。それまでは、アメリカはＷＡＳＰ（White Anglo-Saxon Protestant）、つまり白人、アングロサクソン、プロテスタント主流の国家だと、てっきり考えていた。

ところが、現地に滞在して知ったのは、想像していたのとは、まったく違うことだ。驚いたのは、取引した相手と、金曜にアポイントを取ろうとしても、どうしても取れない。というのは、取引先が金曜の仕事を早く切り上げて、素早く家に帰り、日没から始まる安息日に備えるためだった。キリスト教徒ならば日曜日が安息日だが、彼らは土曜日が安息日なのである。

通常のアメリカ人と異なるユダヤ人に興味を持ったことが、ユダヤ人の宗教や文化を調べるきっかけになった。そして調べれば調べるほどに気づいたのは、彼らが学問や思想の

分野で抜きん出ていることだ。20世紀において世界に最も影響力を与えた3人は、アルベルト・アインシュタインとカール・マルクス、それにジークムント・フロイトとされているが、いずれもユダヤ人なのである。また、ユダヤ人は世界全人口のわずか0・2％しか占めていないにもかかわらず、ノーベル賞受賞者の約22％までもを占めている。

思えば、過去にエジプトやバビロニアが繁栄し、その後、ギリシアやローマが世界制覇を成し遂げた後も、強大な勢力が様々のさばったが、どれもが長続きしなかった。ところが、どうだろう。ユダヤ民族が、約2千年前に祖国パレスチナを追われて、世界各地に四散しながらも、その間、ユダヤ人のアイデンティティーを失わなかったことは、まさに驚異的である。しかも、少数派でありながら、金融だけでなく、医学、文学、科学、美術、音楽などの多くの分野で、彼らが社会に果たした功績には計り知れないものがある。

このようにユダヤ人は、文化や経済に多大の貢献をしたにもかかわらず、不思議に思えるのは、欧米での大型経済スキャンダルの大半は、ユダヤ人が主なのである。著名なアメリカの物理学者、ウィリアム・ピアースは、いみじくも、

「もちろん、ユダヤ人だけが悪党ではない。しかし10万ドルの詐欺事件が起これば、その主犯は誰にでも当てはめられようが、1億ドル超の大規模詐欺事件になれば、間違いなくユダヤ人が主犯だ」

と述べている。

文化に計り知れない貢献をしたユダヤ人が、それと矛盾する悪事を働くのは、誠に不可解である。筆者は、その疑問を解いているうちに、深い背景を知ることになり、これが本書を記す動機となった。それには、彼らの社会や文化を理解しなくては、到底理解できない事柄が多い。そこで、その背景を説明しながら、ユダヤ人が犯した数々の大型経済事件を紹介することにした。犯した犯罪は確かに悪質だが、私たちの反面教師として参考になることが少なくないと思う。

ビジネスの道で「騙すな、騙されるな」という格言がある。誰でも相手を騙さないようにするのは、比較的たやすいことだ。というのは、信用されることは、商売を続ける上で不可欠な条件だからである。いったん信用できないという悪評が立つと、誰もが相手にしてくれなくなるので、正直に取引をすることに努める。

その反面、ビジネスで相手から騙されないように交渉をしたり、取引するのは、言うほど簡単ではない。相手の騙しにも、詐欺的なものから、交渉につきものの権謀術策や嘘やホラに至るまで種々様々ある。ところが、本書で分かるように、驚くほど多くの人が、簡単に騙されているのだ。

騙されないためには、自分のありったけの知恵や経験を活かして、立ち向かわなければ

ならない。先方の意図や真意をすばやく見破らなければ、騙された後で、大いに後悔することになる。従って、万が一騙されたのなら、騙した方が悪いのではなく、騙された自分が悪いのだ。騙した相手を不誠実だと非難する前に、二度と騙されるなどということが起こらないようにしなければならない。

本書に記すユダヤ人の巧妙な悪行が反面教師として、世渡りをする読者にきっと役立つと信じる。

２０１７年７月　東京都港区にて

烏賀陽（うがや）正弘

ユダヤ大悪列伝◉目次

はじめに 3

第1章◉お金との固い結びつき 13

1 歴史的背景 14
2 投資銀行に特化 19
3 ヴィクトリア朝の女詐欺師 21
4 大がかりなアブスキャム事件 26
5 グローバル規模の詐欺事件 45
6 天才詐欺師ミンコウ 51

第2章◉巨額金融スキャンダル 59

1 法を超越する悪者たち 60
2 ジャンク・ボンドの帝王ミルケン 77
3 後を絶たぬインサイダー取引 93

第3章◉ポンジ・スキームの詐欺師たち

1 ポンジ・スキームとは 104
2 ホフェンバーグ詐欺事件 107
3 史上空前のメイドフ事件 110
4 オレの方がメイドフよりも賢い 139
5 新手のポンジ・スキーム詐欺 146
6 とめどもないポンジ・スキーム 149

7 ヘッジ・ファンドのポンジ・スキーム 152

第4章◉ロビイストのスキャンダル 159

1 ロビー活動とは 160
2 ロビー活動に着眼したユダヤ人 166
3 悪名高いエイブラモフ事件 171

第5章◉慈善事業を食い物に 193

1 ユダヤ人は慈善事業に熱心 194
2 ツェデカとは 196

3 寄付金の悪用 198
4 子供向け慈善団体のスキャンダル 200
5 仲間のユダヤ人を騙す 202
6 メット・カンセルのスキャンダル 204
7 家族ぐるみで福祉事業の詐欺 209
8 慈善団体を利用して資金洗浄 212
9 セファルディムの移住 214

結び 221

参考文献 223

第1章◉お金との固い結びつき

1 歴史的背景

ユダヤ人がお金の運用、つまり金儲けについて、重要な歴史的役割を果たし、大きな足跡を残したことは否めないと思う。

事実、ユダヤ人は絶えず新しい事業を創出し、特に金融を対象とする、様々な革新的ビジネス形態を考案する先駆者となった。彼らは遠い昔から、適正利潤や公正販売価格の仕組みを考案しただけでなく、近世では不換紙幣（金貨や銀貨と交換できない紙幣）を案出し、流通証券を最初に実用化したといわれている。だが、当時のユダヤ人の金融業は金貸しが主で、現在の質屋や両替商に相当するものだった。

それを近代的銀行業務に大きく発展させたのが、著名なユダヤ人大富豪の一家、ロスチャイルドである。もともと同家は、神聖ローマ帝国の自由都市フランクフルトのゲットー（ユダヤ人隔離居住地）に、１４６２年以来、長らく押し込められ、忍従を強いられてきた。

そこでロスチャイルド家をゲットーから解放し、勃興させた開祖は、マイヤー・アムシェル・ロートシルト（苗字はドイツ語読み、「赤い盾」の意味）である。１７６０年代に、ゲ

ットーの出身から、金融業者として成功した後に、特権を享受できる「宮廷ユダヤ人」に列せられた。

宮廷ユダヤ人とは、中世ヨーロッパにおいて、キリスト教徒の支配者を相手に、資金調達と運用を行ったユダヤ人金融業者を意味する。彼らは支配者に融資するうちに、宮廷ユダヤ人の肩書とゲットー外に住む特権を受けるようになり、その他、彼らは資金調達以外にも、様々な恩典を与えられた。例えば、支配者のために外交や貿易を行ったり、ユダヤ人同士の繋がりを利用して、食料や武器、貴金属などを確保することができた。

その典型がロスチャイルド家なのである。１７８９年にマイヤー・ロートシルトは、宮廷御用商人として、対外借款に携わるようになり、１７９５年頃からフランクフルト地方の領主、ヴィルヘルム９世の投資事業にも参加できる立場になった。こうしてロスチャイルド家は、１７９０年代に急速に勢力を伸ばして行く。

マイヤー・ロートシルトは、巨大な財力によって、社会的、政治的影響力を持つようになり、それが５人の息子に引き継がれて、ヨーロッパ全域に及んだ。長男のアムシェルはフランクフルト、次男のザロモンはウィーン、三男のネイサンがロンドン、四男のカールはナポリ、五男のジェームスはパリと、５か所に分かれて銀行業を拡大させた。

父親マイヤーは、ヨーロッパ主要都市に、息子５人を住ませて支店網を設けると、互い

に密接に協力させながら、現在に至るまでの強力な基盤を築いた。当時のヨーロッパにおける国家を至上とする国家主義が台頭する流れの中で、他に先駆けて、国境を越えた国際金融事業をいち早く立ち上げたのである。

中でも有名なのは、異国間の機敏な連携による成果だ。すなわち、ロスチャイルド家の手先は、１８１５年、ナポレオンが、ワーテルローでイギリス連合軍に敗退したことを、政府の連絡よりも丸一日早く、ロンドンのネイサン・ロスチャイルドに知らせた。ナポレオン敗北の報をいち早く入手したネイサンは、したたかな手段に打って出た。

通常ならば、フランスの敗北で、公債相場が上昇すると予想されていたにもかかわらず、慌てて買いに出ずに、逆に猛烈な売りに出たのだ。市場は、大手のロスチャイルドが売りに転じたというので、ナポレオンが、てっきり勝利したと判断して売りが集中し、債券価格は一斉に暴落した。

そこでネイサンは、いったん債券が、紙屑同然の値段になったのを見届けると、一転してそれを買い占め、証券取引所が閉鎖した時点で、取引所に上場されている全公債の大半を取得していたのだ。

翌日、ナポレオンの敗北が報じられると株価は急騰し、彼はこれによって約３００万ドル相当だった自己資産を約75億ドルに増やし、実に２５００倍に上る巨利を得た。この鮮

やかな手法は、後に「ネイサンの逆売り」と呼ばれるほど有名となり、ロスチャイルド財閥の確固たる礎をヨーロッパに築いたのである。

ヨーロッパ各国の産業化が進むにつれ、同家の業績は一段と発展・拡大し、スエズ運河やヨーロッパ鉄道網の建設資金を提供するまでに急成長した。19世紀にロスチャイルド家は、世界最大の個人資産を保有するに至った。

栄華を誇ったロスチャイルド家だが、20世紀に入ると、彼らに対する弾圧が激しくなった。中でもナチスの台頭により、ウィーンの当主、ルイ・ロスチャイルドはゲシュタポに連行されたものの、全財産没収と外国への出国を条件に釈放され、アメリカに亡命した。

このような数々の苦難に会いながらも、ロスチャイルド家は現在でも、スイスやパリ、ロンドンに本拠を置いて金融業を大きく展開し、たくましく生き抜いている。

もちろん、金融界でロスチャイルド家が強大な力を振るったことは事実だが、同家だけが業界を独占していたわけではない。

19世紀初頭までは、ユダヤ人は職業上の厳しい制限を科せられ、役人になることや、工場を持つことさえ禁じられたので、彼らの大半は、行商人か小売店主の職に甘んじていた。だが、18世紀末のフランス革命によって、ユダヤ人が身分解放されるや、開業医や弁護士、ジャーナリズムなどと専門的な知識や才能に基づく「自由業」への進出が許され、多く

が金融業に進出することになった。

その結果、ロスチャイルド家以外にも、多数のユダヤ人金融業者が現れた。代表的なのは、フランスのペレイール兄弟やソロモン・ハイネ、プロイセン王国の宮廷ユダヤ人、ゲルゾーン・フォン・ブライヒレーダーなどである。

特筆すべきは、先のユダヤ系フランス人、ペレイール兄弟の果たした役割である。彼らは、近代銀行業務の要である有価証券発行や長期信用供与の制度を開発して、現在のクレジット・カードへの道を大きく開いた。

また、ロシアにおいても、１８５３年～１８５６年のクリミア戦争をきっかけに、ユダヤ人資本家、バロン・ジョセフとゴラツィー・ギンズブルク親子や、レオポルド・クロネンベルグとイヴァン・ブロッホなどが、同国の銀行の設立に多大の貢献を果たしている。

このように多くのユダヤ人は、ヨーロッパの各地で、当時の権力者の資金的支援者となって、国家経済を支え発展させた。そこで育まれた豊かな才能と経験が、アメリカにもたらされ、開花するのである。

烏賀陽正弘（うがや・まさひろ）

京都大学法学部卒業。幼少期をニューヨークと中国で過ごす。東レ㈱に入社後、国際ビジネス業務に従事して広く活躍し、そのために訪問した国は100カ国超にのぼる。海外より帰任後、同社マーケティング開発室長を経て独立し、現在、国際ビジネス・コーディネーター、著述家、翻訳家として活躍中。
著書には『男だけの英語』『ここがおかしい日本人英語』（以上、日本経済新聞社）、『読むだけで英語に強くなる』（潮出版社）、『ユダヤ人金儲けの知恵』（ダイヤモンド社）、『ユダヤ人ならこう考える！』、『超常識のメジャーリーグ論』、『頭がよくなるユダヤ人ジョーク集』（以上、PHP新書）、『ユダヤ人の「考える力」』（PHP研究所）、『必ず役立つ！「〇〇の法則」事典』（PHP文庫）、『シルバー・ジョーク』、『ラスベガスを創った男たち』（論創社）など。
訳書に『これから10年、新黄金時代の日本』、『世界潮流の読み方』、『変わる世界、立ち遅れる日本』（いずれもビル・エモット著、PHP新書）、『毛沢東は生きている』（フィリップ・パン著、PHP研究所）がある。

ユダヤ大悪列伝

2017年9月5日　初版第1刷印刷
2017年9月15日　初版第1刷発行

著　者――烏賀陽正弘
発行者――森下紀夫
発行所――論創社
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町2-23　北井ビル
tel. 03(3264)5254　fax. 03(3264)5232
振替口座 00160-1-155266　http://www.ronso.co.jp/

ブックデザイン――奥定泰之
印刷・製本――中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1649-4
©2017 Masahiro Ugaya, Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。